

厚生科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）
分担研究報告書
要介護者と介護者が共世界を構築するプロセス
分担研究者 村岡宏子 東邦大学助教授

研究要旨：本研究は、介護関係を通じて要介護者と介護者がどのように共世界を形成していくのかを明らかにし、第三者が介入する際の示唆を得ることを目的とした。要介護度1に認定された要介護者と介護者のカップルを分析した結果、共世界の構築プロセスは第三者の利用までに6局面で構成されていた。

A. 研究目的

一般に、家族介護がうまく維持されるためには、介護者と要介護者の関係が緊密に構築しなおされる必要がある。要介護者の病気が重くなれば、それだけ介護者への依存度は増し、二者は同じ時間と空間をそれまで以上に共有せざるをえなくなる。家族介護の必要性は、家族関係の再編をせまることになるだろう。介護の必要から形成される介護者と要介護者の関係と、それを介して再編される彼らの社会関係の全体を「共世界」と呼ぶことにする。本研究は、この共世界が、どのように形成され、どういう構造をもつのかを明らかにする。

B. 研究方法

1. 研究デザイン：質的帰納的手法

2. データ収集：研究参加者それぞれに対話的インタビューを約60分行った。

4. 分析方法：1) 一文脈のなかで、介護保険サービスを導入するきっかけ、介護生活の現状、二者の関係性の変化について語られている意味を分析解釈した。2) その際介護保険サービスを導入する前と後を時間軸に沿って整理し、共世界の構築を特徴づける現象をカテゴリー抽出した。

C. 結果

要介護者の夫は、退職後飲酒の量が増え、アルコール依存症と糖尿病を併発したが、自己判断でインスリンを中止してしまう。夫は家に閉

こもりどんどん病気が悪化した。こうした状況にあつて、二者は共世界をどのように形成していくのかを分析した結果、＜イライラした生活＞＜時間をともにする＞＜積極的介入＞＜他者への影響＞＜妻と歩調をあわせる＞＜妻への感謝と妻の生活の尊重＞の6局面が見出された。

最初妻は、夫が昼間からアルコールを飲む生活にイライラしていた。しかし、この生活の転機は、妻の二つの行動による。第一に、仕事を早朝のパートに切り替えて夫と過ごす時間をもった。第二に、妻が介入してインスリンを注射した。これが息子の態度に変化をもたらした。一方、ケアマネージャーのアドバイスから、「通所介護」を利用したことで、夫の生活に急激な改善をもたらしていった。

D. 考察

社会関係を失っていた夫が、通所介護を利用することで、新しい社会関係を切り開いていく過程が確認できた。他方この新しい社会関係の形成は、二者関係に反作用を及ぼした。夫は介護者としての妻のありがたさを知るだけではなく、妻を広い社会場面の中におくことで妻の仕事の価値を認めることができた。

E. 結論

共世界は、二者関係が社会関係に影響を及ぼし、社会関係が今度は二者関係に影響を及ぼすという動的な構造をもっていた。

要介護者と介護者が共世界を構築するプロセス
村岡宏子

I. 研究方法

1. 用語の定義

本研究では、介護の必要から形成される要介護者と介護者の関係と、それを介して再編される彼らの社会関係の全体を「共世界」と呼ぶことにする

2. 分析方法

- 1) 一つの文脈のなかで、介護保険サービスを導入するきっかけ、介護生活の現状、二者の関係性の変化について語られている文脈の意味を分析解釈した。
- 2) その際、介護保険介護サービスを導入する前と後を時間軸に沿って整理し、共世界の構築を特徴づける現象をカテゴリー抽出した。

II. 研究参加者の紹介

要介護者 A は、60 歳代半ばの夫であり、要介護度 1 に認定されている。介護者は 50 歳代後半の妻である。

要介護者と介護者は結婚 30 年以上になる。3 人の子供がいるが、一緒に同居しているのは 20 歳代半ばの 3 番目の子供だけである。また、80 歳半ばの姑が同居している。姑もまた要介護度 1 に認定されている。A 氏の妻は二人の介護者であるが、ほとんど毎日パートタイマーの仕事に出ている。

夫は大手の会社で営業部長、支店長をつとめて数年前に退職した。退職時から鬱状態になり、酒の量が増え、ついにアルコール依存症となる。さらに糖尿病と診断されるが、インスリンを自己判断で中止したため、その後末梢神経障害、白内障、肝障害などの合併症が出現した。

III. 分析解釈

要介護者と介護者へ行ったインタビューを時間軸に沿って整理した結果、共世界の構築プロセスには 6 つのカテゴリーが見出された。

1. <イライラした生活>

夫は、会社を退職後家に引きこもるようになっていた。妻は以前から日中のパートにでていたため、昼間から家にいるようになった夫といっしょに過ごす時間が乏しかった。そのことが、夫の飲酒を増やす原因にもなったのである。以下は、この時期を思い出して語った例である。

妻：お昼から（アルコール）飲むと、夕食に間に合わないまでに、もう飲みすぎて気持ちよくなって寝ちやうってというような、そういうもう本当、乱れた生活が続きました。要するに野放し状態。

「野放し状態」から、妻も飲酒を控えるように再三注意したが、効果はなかった。また夫がアルコールを飲んでいるのを見ると、妻は気持ちがふさいだし、時にはパニック状態になることもあった。二人とも精神的にイライラした生活が数年ほど続いたのである。どうしても生活行動が改善されず、堂々巡りの時期を次のように語っている。

妻：もう注意はしても、やっぱり結局、本人にとっては嫌なことですよ。お酒飲んじゃいけないとか、そういう、いけない、いけないばかりのことだから（本人は）面白くない。

2. <時間をともにする>

この生活の転機のきっかけとなったのは、妻の二つの行動であった。まずその一つは、夫と昼間いっしょにすごせるように、仕事を昼間のパートから早朝のパート（朝 5 時から 9 時）に切り替えたことである。そうした状況を次のように語った。

妻：ここ丸 3 年くらいは、その仕事（食品関係）。うん、だから、かえって、まあ私もそういう風な仕事についたのが、昼間見てあげられるってことね。

3. <積極的介入>

その第二の行動は、夫が数か去年の春に外出先で倒れ、病院に入院したことをきっかけに、ただ同じ時間を過ごすだけでなく、夫の生活に「積極的に介入しよう」と決意したことである。まず気分転換に病院を換

え、「一緒に受診する」ようにした。インシュリンも妻が注射した。これらのことを次のように語っている。

妻：最初の内科の先生からもう少しね、気分転換に病院も変えますかっていうことで、〇〇医大から独立した先生について、かかったんですけど、また今は、〇〇医大のまた別の先生に変えていただいて。で、その頃から私ももう、一緒に受診するようになりまして、一時できない時はインスリン、私がやっぱり打ったり、まあ、要するに、野放し状態だったのが、いろんなことがあってから私も一緒にこう、何事も行動したり、やっぱり、私も介入していったんですよね。

研究者：介入していったのは、じゃいつですか。

妻：去年ですね。

4. <他者への影響>

こうした妻の積極的介入は子供の態度にも変化をもたらした。それまで同居の子供は、介護にはほとんどかわりをもたなかったが、父親が外出先で倒れた事件をきっかけに母親の大変さを理解するようになった。

妻：お母さんは大変なんだということで、『これから協力するから、何でも言っ』ってというようなことを、やっぱり発言しましたね。

また、妻は病院で偶然見かけた介護の本を読んで、さらに間質性肺炎になった姑のもとにやってきたケアマネジャーを介して、「通所介護」のを知り、夫にそれを勧めたところ、それまでアルコール依存症の入院治療をかたく拒んでいた夫がそれに同意した。最初は月と木の週2回だったが、今年の春からはさらに土曜日も追加された。こうした妻の介入とケアマネジャーのかかわりが、夫の生活に急激な改善をもたらすことになった。

妻：いろんなリハビリとか、ゲームにたいしてもお友達もたくさんできて、そして意欲が出てきて。このころから、趣味でやっていた絵を描くようになってきたの。手の震えもおつたし。とってもね、こっから送り迎えで来ておね、お友達にも「じゃ、また」という感じで、友情も湧いてきたみたい。

5. <妻と歩調をあわせる>

夫は、家に閉じこもっていた状態を脱して、外界と積極的に接触することができるようになったわけだが、それに比例するように、妻に協力して、その生活リズムに自分を合わせる努力をするようになった。

要介護者：朝は3時半に起きています。

研究者：奥さんと一緒に？

要介護者：女房が5時から勤めに出ますからね。…それまでに自分でパンと…サラダと全部前の日に用意して、パンとコーヒーと牛乳と飲んで、女房を送り出すと5時ですからね。

夫は妻とともに朝3時半に起き、いっしょに朝食をとり、しかも自分の分は前日から用意しておき、5時に妻を送り出すのである。この「妻を送り出す」という表現には、彼が妻との時間を共有しようとする積極的な姿勢がうかがわれる。

6. <妻への感謝と妻の生活の尊重>

妻とのこうした生活リズムの共有は、夫のうちに、いままでに感じたことがないような妻への気持ちを生み出している。

要介護者：今までにない愛情っていうのを感じてきていますね。

研究者：じゃ、愛が深まってきた？

要介護者：そうそうそうそうそう。結婚当初よりも、余計感じるようになったですね。こういう生活をするようになってからは。もう愛情以外のものじゃないかな、と思うんですね。いわゆる有り難さというのかな。

夫が妻にありがたさを感じるのは、妻が車椅子を押してくれるときである。それにもかかわらず、夫は妻が仕事をやめて24時間自分と居てくれることを要求してはいない。それは仕事にやりがいをみだしていることを知っているからだと解釈できる。以下はそのことを語った例である。

要介護者：車椅子に乗ってますからね、もう女房がいなくて一番困るね。だから、女房の有り難さって

うをつくづく感じますね。

研究者：そしたら、お仕事をやめてほしいですか？

要介護者：いやいや、それは自分（妻）も、70までも80までも働くんだって言ってるけどね。

IV. 考察

退職した結果それまでの社会関係を失っていた夫が、デイケアを積極的に利用し、それによって新しい他者との出会いをすることができたのは、妻が夫との二者関係を再構築したからだと解釈できる。ここに介護者と要介護者の関係の構築が新たな第三者による介護の受け入れを可能にし、新しい社会関係を切り開いていく過程が確認できる。他方この新しい社会関係ができたことで、今度は二者関係に反作用を及ぼしている。たとえば、夫は介護者としての妻のありがたさを知るだけでなく、妻にとっての仕事の価値も認めるようになった。これは彼が妻を広い社会場面のなかで見ることができるようになった証拠である。共世界は、二者関係が社会関係に影響を及ぼし、社会関係が今度は二者関係に影響を及ぼすという動的な構造をもっていると思われる。したがって、第三者による介護の導入の際には、共世界とその動的な構造に注目する必要があるだろう。

研究要旨：介護負担感、肯定的体験、人生満足度のとらえ方には、介護者と要介護者との過去の人間関係の様相と将来の生活像に対する予測が大きく影響していると考えられる。さらに、介護者の夫や他の家族から得られるサポートの質と量などが複雑にからみあい影響力を及ぼしていると思われる。今後は、それらの構造についてさらに分析をすすめることが課題である。

A. 研究目的

在宅高齢者の介護者に関する介護負担感については、既に多くの知見が報告されているが、その負担感とは独立して存在すると指摘されている介護の肯定的な側面については十分に明らかにされているとは言いがたい状況にある。本研究では、量的調査に基づいて選定された介護者に対して質的調査を行い、介護負担感、介護の肯定的体験、人生満足度に関する様相とその背景となる要因を探索することを目的とした。

B. 研究方法

東京都葛飾区で要介護認定を受けた高齢者とその介護者のうち、量的調査後に訪問の承諾を得た対象者に対して、インタビュー調査を実施した。本報告では、4例の女性介護者（長男の配偶者）について、介護負担感、介護の肯定的体験、人生満足度について強弱の異なるエピソードを抽出し、その背景となる要因を検討した。

C. 研究結果

エピソードの具体的な内容については添付資料に示したとおりである。

[事例1] 59歳（要介護者89歳，女性）

介護負担感が強く、否定的な介護体験をもつ。その経緯には、自身の健康不良とともに、これまでの要介護者との人間関係が良好ではないことが大きく影響している。さらに、夫からの精神的なサポートや親族の協力が得られないという不満足感から、心身ともに限界の状況にある。

[事例2] 52歳（要介護者87歳，男性）

介護の負担感をあまり感じていない。もし動けなくなったときは、仕事をやめてお世話をすると決めている。過去に舅から受けた気づかいに対する感謝の念がある。夫との絆は強く、信頼を寄せている。友人関係も豊かであり交流を大切にしている。

[事例3] 66歳（要介護者88歳，女性）

介護体験を肯定的にとらえ、寝たきりにさせたくないという信念がある。長男の嫁として、農家と仕事を切り盛りしてきたこと、民生委員を16年間続けているという自負心がうかがえる。楽しみながら、その上で介護できれば理想的だと考えている。

[事例4] 42歳（要介護者81歳，女性）

要介護者は、ほぼ自立した生活を送り、近隣の助け合いが充実しているため、介護負担をあまり感じ

ていない。むしろ、再婚後の子育てのことで悩んだ。世代差や考え方には違いがあり、できる人が、できるだけやるのが一番よいと考えている。

D. 考察

介護負担感、肯定的体験、人生満足度のとらえ方には、介護者と要介護者との過去の人間関係の様相と将来の生活像をどのようにイメージしているのかという予測が大きく影響していると考えられる。さらに、介護者の夫や他の家族から得られるサポートの質と量などが複雑にからみあい影響力を及ぼしていると思われる。今後は、それらの構造についてさらに分析をすすめることが課題である。

添付資料

介護負担感と介護の肯定的体験，介護者の人生満足度
西田真寿美

介護負担感，介護の肯定的体験，介護者の人生満足度のとらえ方には，介護者と要介護者との過去の人間関係の様相が大きく影響していると考えられる。どのように過ごしてきたのか，そして，これからどのように過ごすことができるのかという将来像を予測することも，相互に関連している。さらに，介護者の夫から得られるサポートの質と量，他の家族との関係などが複雑にからみあい，負担感を増大させたり，介護の体験を肯定的なものへ変えたりする影響力を及ぼしていると思われる。本報告では，それぞれのエピソードに基づいてキーとなる語りを抽出し，その内容について対象者の言葉を要約した。

I. キーとなる語り

	介護負担感	介護の肯定的体験	人生満足感
事例 1	(強) 自分のことで精一杯，今は 200% の負担	(低) 大事なお嫁さんと言われなかったら面倒は見られない	(低) 楽しいことは何もない
事例 2	(中) 世話ってほとんどしない，洗濯とかデイサービスに行く準備だけ	(高) もし動けなくなったときは仕事をやめて看る。若い頃，おじいちゃんが子供の布オムツを洗って助けてくれた	(高) 父さん(夫)がそばにいて教えてくれたから，夫婦でやれたから良かった
事例 3	(中) そんなに努力しないで，自然体で，深刻に考えないようにしている	(中) 寝たきりにさせない，さりげなくお年寄りと付き合える	(高) 長男の嫁として，農家やって商売やって。楽しみをしながら，お家で介護できれば一番理想的
事例 4	(弱) 元気なので，隣同士でコミュニケーションとりながら	(中) できる人ができるだけやれば一番いい。家で，できるだけ居て欲しい	(中) 一番葛藤があったのは子供に対する育て方，何が正しいか一つだけではない

注：表中の()内には各項目の「強中弱」と「高中低」の程度を表している。

II. 各事例の要約

事例1. 自分のことで精一杯、楽しいことは何もない

介護者：息子の配偶者 59 歳

要介護者：女性 89 歳 要介護度 1

介護サービス：ヘルパー週 7 回

介護負担感が強く、否定的な介護体験をもつに至った経緯には、自身の健康不良とともに、これまでの要介護者との人間関係が良好ではないことが大きく影響している。積年の嫁姑の確執は深刻であるように見受けられ、嫁として大事にされなかったという思いが強い。さらに、夫からの精神的なサポートが得られていないことや隣家に住む親族の協力が得られないという不満感から、心身ともに限界の状況にあると考えられる。さまざまな出来事から人間不信に陥っているが、ジョギングの仲間で愚痴をこぼせる友人に出会い、支えられている。

1. 介護負担感 <自分のことで精一杯、今は 200%の負担>

10 年ほど前から持病のために体調がすぐれず、そのコントロールなどで忙しくしている。自分のことに精一杯である。夫からの精神的なサポートや親族からの協力を得ることができていない。

私の病気は糖尿病ですけど、… … … 食事をきちんと食べないと血糖があがってしまう。朝と夕方、一日に 2 回、インシュリンを打っている。朝 40 分、夕方 40 分歩く。

介護するのに 10 年は長い、1 年でたくさん。今は 200%の負担。ものすごく忙しいんだけど、2 日に 1 回のご飯を炊く。本当は自分のことだけで精一杯。ご飯を 3 合炊いて冷凍しておくの。ヘルパーさんから冷凍しておいてっていわれたのよ。介護 2 から介護 1 になっちゃったので、ヘルパーさんはそこまで時間がないからやってくれない。何かあると本人じゃなく私に言ってくる。

前はご飯の支度を 3 食していた。法律は平等なんだから、隣の（次男の）嫁さんにも（介護を）やってもらいたい。交替でみてほしいと、私たち夫婦 4 人で話し合いをした。にげまくっている … … … 日本人は家族での話し合いが足りない。流れるままにきている。長男は何も決められない。私が何回も入院しているのに、カバーしてくれない。主人はだまって、かばってくれない。

2. 介護の肯定的体験 <大事なお嫁さんと言われなかったら面倒は見られない>

夫の祖母と自分の母親を介護した肯定的な体験があり、当初は要介護者の面倒を看るという覚悟をもって介護に臨んでいた。その後の人間関係から、大切にされたという実感を持たず、介護を続けることに対して報われない思いと怒りの感情がある。

結婚した時は大おばあちゃんと一緒に住んでいた。とてもいいおばあちゃん。誰にでも平等に接するいい人だった。目が悪くて、オマルを掃除してあげる人が必要だった。… … … 自分の母の時は 1 年見た。近くの病院に入院して、付き添いもした。1 年は看られる。

お義母さんと心中するつもりで看ると決めたんだけど、最近はどういうや。人に接するのと私には態度が違うのよね。隣（次男夫婦）とうちの人は別、ちがう。嫁は他人だから。こないだ、お義母さんと初めて怒鳴りあった。最近、特にいやだ、もう限界だわ。… … … 権力は移るもんですよ。パンツを洗ってもらうようになって、お世話になるようになったら、権力は移るわけじゃないの。なんで、わたしばかり。だからって、ほっぽりだすわけにはいかないじゃない。大事なお嫁さんと言われなかったら面倒は見られない。

3. 人生満足感 <楽しいことは何もない>

末っ子で可愛がられて育ち、苦勞がなかった独身時代と比較して、結婚後の生活に満足感をもつことができない。また、病気になる前までは仕事や趣味も楽しんでいた様子であるが、病気療養と介護のために不都合となり、楽しみを失っている。これらのことは介護負担感を増大させる一因ともなっている。

兄弟は 2 人いて、私は末っ子。姉は 10 歳違い、兄は 6 歳上で、もう死んだけど。生まれ育ったところから悩んだことなかったのに、結婚してから苦勞した。姉と兄が私の面倒をみてくれて、可愛がってくれて、もまれてなかったから。うちの子の方がもまれている。世の中はすごいものだ。

50歳で、血糖値があがって悪くなった。病院にとびこんだら、血糖がすごく高くなっていて、教育入院。2週間で退院した。それから、パートの仕事をやめて、1年間くらい押し花教室に通っていたけど、やめた。ハワイアンをやろうと思ったら、お義母さんを病院へ連れてきてくれって言われた日と重なって、結局やめた。楽しいことは何もない。

事例2. 農作業で大変なとき、おじいちゃんが黙って子供のオムツを洗ってくれた

介護者：息子の配偶者 52 歳

要介護者：男性 87 歳 要介護度 1

介護サービス：通所リハビリテーション週 1 回

介護負担感は中程度、介護体験の肯定的意識は高く、人生満足感が高い。介護者にとっては、洗濯やデイサービスに行く準備、病院への付き添いなどが主なお世話であり、介護の負担感はあまり感じていない。時々、排便で衣類やトイレを汚すことがあるが、何も言わずにさりげなく気づかっている。舅姑の二人が動けなくなったときは、仕事をやめてお世話をすると決めている。結婚当時の農作業で大変な時期に、要介護者である舅が孫の布オムツを洗って助けてくれたことに対する感謝の念を持ち続けている。また、夫と一緒に農作業をできたことが絆であり、満足感と信頼を寄せている。友人関係は豊かであり、その仲間との付き合いを大切にしている。現在は孫の成長が楽しみであるが、遠く離れて一緒に暮らせないことを残念に思っている。

1. 介護負担感 <世話ってほとんどしない。洗濯とかデイサービスに行く準備だけ。>

洗濯やデイサービスに行く準備、病院への付き添いなどが主なお世話であり、介護の負担感あまり感じていない様子である。時々、排便で衣類やトイレを汚すことがあるが、何も言わずにさりげなく気づかっている。

世話ってほとんどしない。元気なので。パートにでかけているから、洗濯とかデイサービスに行く準備とか、そういうのだけ。床屋はお父さん(夫)がやってくれるの。トイレを汚したりした時は怒らず、そのまま。時々そういうことがあるんですよ。便の方、自分で隠して洗ったりしているけど。しっかりしている。洗い直ししたりするけれど、でも言わない。知らん振りしてる。… … … おばあちゃん連れて検査行くときに、薬がいつなくなるか聞いて。薬は自分で管理して飲んでるんだけど、病院に連れて行ったり。

2. 介護の肯定的体験 <もし動けなくなったときは仕事をやめて見る。若い頃、おじいちゃんが子供の布オムツを洗って助けてくれた>

現在は介護の負担感少ないが、舅姑の二人が動けなくなったときは、仕事をやめてお世話をすると決めている。そのためには自分たちが健康でいるようにすることが大切だと考えている。結婚した当時の農作業で大変な時期に、要介護者である舅が孫の布オムツを洗って助けてくれたことを未だに覚えている。また、将来自分たちに介護が必要になったときは、子供に頼らず、仲間がいるこの土地の施設で過ごしたいと考えている。

もし動けなくなったときは、仕事をやめて見る。どっちも。あと大変な時はショートでもつかって。そういう風にしてあげたらいいなあと思う。自分がたがまず健康で。大変だば、介護する人が年いって、私が体が弱くなれば。(舅姑は)施設に入るのを嫌だとは言っていない。おばあちゃんが、そういうふうになったら、無理しなくてもいい、預けられるようなところがあったら預ければいいって。

私の方が年いけば、子どもがたも面倒みれなくなると思うし。施設はもし入れれば入ったほうがいいんでねえべかと思っで、自分で。入れればな。そのほうが気が楽って感じがする。娘がたは、引き取りたいというような言い方するのよ。… … … でも誰も友達もないような所には行きたくない。だからって、ここでひとりぼっちでもいたくない。みんな仲間がいる施設さ行きたくないなあと思う。

3. 人生満足感 <父さん(夫)がそばにいて教えてくれたから、夫婦でやれたから良かった>

結婚後、初めての農作業で大変な時期を過ごしているが、夫と一緒に仕事をできたことが絆であり、満足感と信頼を寄せている。子供たちも自分のことを気にかけてくれている。友人関係は豊かであり、その仲間との付き合いを大切にしている。現在は孫の成長が楽しみであるが、一緒に暮らせないことを残念に思っている。

農作業が一番大変だったなあと思う。お嫁にきて初めて百姓をした。ほとんど父さん(夫)と一緒に仕事したから、できたなあと思う。朝も土曜日も日曜日も父さんが側にいて教えてくれた。お婆ちゃんは、あまり百姓はやらないけれど、おじいちゃんが稲刈ったり、手伝ったり。お舅さんの間に入ってやるってば、現実的にきついと思ったけども、夫婦でやれたから、やれたのかなあと思う。(一番頼りにしているのは)やっぱり父さんになるな。父さんだけしかいないかもしれない。

友達はたくさんいる。この近くにも沢山います。こら辺の嫁さんが全部集まって、旅行したのよ、昔は。そういうグループがあったのよ。夫婦で旅行したりいるんなところに行ったの。キャンプしたりいるんなことをしたから面白かった。

その人たちとは今もつきあって行き来している。子どもがたとキャンプしたりする時期が、一番楽しかったんじゃないかなあと思うねえ。

ちょっと体調崩して、去年、1ヶ月くらい入院したんですよ。その時はやっぱり、みんながびっくりして、かけつけてきたので。心配してるんだべなあと、その時は思った。ああ、子どもも心配してるのかなあと思って。すぐ来たから、遠くても来たからね。嬉しかったよ、やっぱり。

生きがい？う～ん。孫のことを考えるだけで。やっぱりこれから、この沢にいと、子どもがたまになかなか来ない。せめて一緒に暮らすっていうのか、孫の成長をみたい。一緒に暮らしていれば、嫁さんに負担かけないように、口出しはしないようにしたいけども、生きがいになるんだかどうか、夢かな。

事例3. 寝たきりにさせたくない、自然体で、深刻に考えないようにしている

介護者：息子の配偶者 66 歳

要介護者：女性 88 歳 要介護度 3

介護サービス：通所リハビリテーション週 2 回，ショートステイ月 1 回，ヘルパー週 1 回

介護負担感は中程度，介護体験の肯定的意識は中程度，人生満足感は高い。食品ストアを営業しているため多忙であるが，介護サービスをうまく利用しながら介護を続けている。寝たきりにさせたくないという強い考えから，娘と協力して家でずっと面倒をみることにした。要介護者の姉が痴呆症で長期間療養していたこと，過去に要介護者が夫の介護を献身的に行っていた姿を目にしていたことなどが影響を与えているようである。誰でも年をとればこうなるという考えをもち，努力よりも自然体で，深刻に考えないようにしている。同居の娘と孫がよく協力してくれるので，負担感さはほど強くない。これまでの人生を振り返り，長男の嫁として，農家と仕事を切り盛りしてきたという自信がある。また，民生委員を 16 年間続けており，他者から相談を受けたり痴呆症の方との関わり方を学び，忍耐と工夫でうまくやれているという自負心がうかがえる。忙しい日々の中でも，海外旅行やコーラスなどを積極的に楽しみながら，その上で介護できれば理想的だと考えている。

1. 介護負担感 <そんなに努力しないで，自然体で，深刻に考えないようにしている>

食品ストアを営業しているため多忙であるが，介護サービスをうまく利用しながら介護を続けている。誰でも年をとればこうなるという考えをもち，努力よりも自然体で，深刻に考えないようにしている。同居の娘と孫がよく協力してくれるので，負担感強くない。

ゆっくり入るのが好きな人でしょ。うちのお風呂が良いって言うので，うちのお風呂に入ってます。ヘルパーさんも昼まで来てくれますし，後はセンターから 3 時半に帰って来ますでしょ。ですから，お夕飯とかね，そういうのでは，まあ，関わってますけど。でも，普通だったら，できないんじゃないかなと思うくらい，結構忙しいですよ。

私はね，割合と性格的っていうのかしら，あんまりこう，少くらの事では拘らないっていうような自分の心。誰でも年取ったら，こうなるんじゃないかなっていう風な考えを持って，そんなに努力しないで，だから，割合自然体で，あんまりこう，深刻に考えないで。でも，もう毎日，もし，おむつやなんかになって，すごく手がかかるようになったら，面倒見られるかなって，果たしてと思いますよ。

私でも体がこう弱かったら，すごく負担になるのかなって。丈夫ですから，何かやってあげるのにも，出来るけど。もし，すごく私が病弱だったら，もっと早くそういう所に頼んで，預けてしまうんじゃないかなと思います。で，また，うちの娘がすごくね，すごい面倒見が良いんですよ。孫も。… … … でもね，家のお婆ちゃんが一番良い所はね（通所リハビリテーションに行くことを）嫌がらないっていうこと。ですから，そういうものはね，本当に私も感謝してます。

2. 介護の肯定的体験 <寝たきりにさせない，さりげなくお年寄りと付き合える>

寝たきりにさせないという強い考えから，娘と協力して家でずっと面倒をみることにした。要介護者の姉が痴呆症で長期間療養していたことや，過去に義父（要介護者の夫）の介護を献身的に行っていた姿を目にしていたことなどが影響しているようす。また，民生委員を 16 年間続けており，他者から相談を受けたり痴呆症の方との関わり方を学び，忍耐と工夫でうまくやれているという自負心がうかがえる。

2 年半前ですけど，それから見ると本当に良くなりました。家でずっと面倒見ますからって連れて帰って来たっていうのは，正解だと思います。最初はもう，本当，寝たきり。あれで，どっか入れちゃえば，寝たきりになっちゃってますよ，たぶん。そういうのには，できるだけしたくないの。娘とも話し合ってますよ。こんなに回復したのは，あえておむつしないようにしたんです。おトイレが自分で行けるようにね。このまま行けば，結構，大丈夫だと思うんです。でも寝たきりにさせない。もう，無理無理起こしてでも。

お婆さん（要介護者）の姉がすごくボケちゃったんです。娘の顔も分かんなくなつて，16 年も。ですから，そのお婆さんを見てるから，絶対ああいう風にはね，したくないなって，それもありましたよね。

お婆さんはうちのお爺ちゃんの介護をしました。それこそ病院に泊まりきりで介護して，ときどき私と交替して，お風呂に家に帰ってきたりするくらいで。それはそれは献身的に。（後妻で自分の子供は）いないんですよ。ですから，可哀想は可哀想ですけどね。すごくきかん気なんです。だからまあ，喧嘩したつてつまらないし，早く言うと（私が）折れちゃってるっていうんですか。ですから，結構，上手く行ってる方かなと自分で採点してんですけど。でも，早く言えば忍耐ですよ。

私ね、民生委員 16 年やってんですよ。うん、やっぱりお勉強も、いろいろやらせて貰ってるんですよ、その痴呆症の人との関わりとか。ですから、いろんな施設に見学に行ったり、老人ホームも行きますし、そういうのが、さりげなく年寄りと付き合えるっていうのが、それがお勉強だったのかなって思います。そういうので、やっぱり家のお婆さんにも対処が出来たんだと思うんですよ。

3. 人生満足感 <長男の嫁として、農家やって商売やって。楽しみをしながら、お家で介護できれば一番理想的>

結婚後、ゆっくり実家に帰る余裕もなく過ごしてきたが、長男の嫁として、農家と仕事を切り盛りしてきたという自信がある。民生委員の仕事もこなしながら忙しい日々の中で、海外旅行やコーラスなどを積極的に楽しむことができています。その上で介護できれば理想的だと考えている。

私、ここへ 22 歳で来たんですけど、第 1 子は流産したんですね。で、それもほら、農家やって、商売やってっていうので、すごくまあ、肉体的に大変だったのね。まあ精神的にも。両親、親たちもいましたし。農家で本家なんですよ。いろんな所に気を使って、お正月でもお盆でも実家に帰るなんてことはなかった。きょうだい達とも、結構、上手にね、旅行出掛けたり、お芝居行ったり、長男の嫁として、計画立てて。嫌な思いしてやっても、一生は一生ですし、一日は一日。自分で言い聞かせてやっています。

2 人流産して、1 人なんです、私の娘が。お婿さん来てね。… … …娘ですからね、やっぱりお嫁さんよりか、何て言うのかしら、気さくでしょ。割に主人がワンマンですからね。もうちょっと気使っても良いかなと思うところもありますよ。(介護は何も) しないですね。そういうことをやってくれない人だから、もう、あの、現実的に何かやって貰おうと思ったり、考えてないですね。

私はね、こういうすごく忙しい思いしてますけどね、海外にはね、年 1, 2 度出掛けんですよ。そうするとね、全て忘れてね、まあ、早く言うと、ストレス解消なのかしらね。区の国際交流会に家の主人が入ってますから、それで、いつも夫婦同伴で海外に出掛けて。その時はショートステイをお願いして、連れてって頂くんですよ。だからまあ、今、そういう楽しみをしながら、お家で介護できれば一番理想的ですから。

あとはね、コーラスやってます。民生委員の女の方だけ 5, 60 人で、まあ、一流の先生が来て教えてくださるんですよ。まあ、その前はね、家、民謡教室やってたんですね。うちのお婆ちゃんも一緒に、10 人ばかり、ここで生徒として、生徒さん来て。私が助手して、あの、名取りの免許もありますから。ですから、そんなので、あの、いろんなこともあるけど、まあ、ストレス解消もそこそこにやりながら、やってます。

事例4. 世代や考え方に違いはあっても、できる人ができるだけやれば一番いい

介護者：息子の配偶者 42 歳

要介護者：女性 81 歳 要介護度 2

介護サービス：通所リハビリテーション週 2 回，ヘルパー週 1 回

介護負担感は弱く、介護体験の肯定的意識は中程度、人生満足感は中程度。10 年前に再婚し、要介護者の隣に転居してきた。病気になってからではなく、なるべく早い時期から交流することがよいと考えていた。要介護者は、元気な頃に比べると気が弱くなっているが、ほぼ自立した生活を送り、長年の近隣の助け合いが充実しているため、介護の負担をあまり感じていない。むしろ、子供の育て方で悩み、精神的にも葛藤のある時期を過ごしている。しかし、従兄妹どうしの再婚であったため、皆、子供の頃から良く知っている関係であり、気兼ねなく相談したり、助け合ったりすることができる。世代間の差や考え方には違いがあるのは当然だと受け止めており、できる人ができるだけやるのが一番よいと考えている。将来もできるだけ、家で過ごしてほしいと望んでいる。将来は、夫婦で支えあうのが基本だと思っているが、実家のある田舎に移り住み、自然の中でゆったりと暮らすことを願っている。

1. 介護負担感 <元気なので、隣同士でコミュニケーションとりながら>

10 年前に互いに子供を連れて再婚し、要介護者の隣に転居してきた。病気になってからではなく、なるべく早い時期から交流することがよいと考えていた。要介護者は、元気な頃に比べると気が弱くなっているが、ほぼ自立した生活を送り、長年の近隣の助け合いが充実しているため、介護の負担をあまり感じていない。

何かの時はね、やっぱり傍にいたほうがいいっていうんで。おばあちゃん（要介護者）もその希望が強くて。でも、私の場合ですと、一緒に建物の家へ住むよりも隣のほうがいいかなと思ったんです。なるべく早い時期から交流してないと、ずっと離れてて、いきなり病気になったからって一緒にするのは、なかなか難しいので、隣同士でコミュニケーションとりながら、徐々にという方がいいと思ったので、全然抵抗なかったです。長男にとっても、育ててくれたのがほぼおばあちゃんですので、みんな一緒にというのが一番理想なので。

ま、元気なので。多少、病気する前は、かなり強気な面もありましたけれど、病気してからは、だんだんね、変わってもしましたので。… … …自分が心配ふって工場もやってたし、主人は営業とかが主だったので。今、ちょっと逆転みたいな感じで、だんだん気が弱くなって。

隣のおばさんは、うちの工場やってたときからパートで来ていたので、ずっとおばあちゃんと仲いいので、嫁に頼むよりもそっちに頼む方が気が楽だっていう面もあるんじゃないでしょうか。皆に助けていただいています。だから、今日も目医者いくのも、私がついて一緒に行くんですけど、おばさんが行くときは、おばさんが連れてってくれるので、そういう意味では楽ですよ、助かっています。おばあちゃんは元気なときからお世話好きだったりしたので、近所で具合が悪くなった人がいると、センターに一緒に行こうとか、こういうところへ相談に行ったらこうしてくれるわよ、みたいな感じで。なんか、ほっとけないみたいですよ。

2. 介護の肯定的体験 <できる人ができるだけやれば一番いい。家で、できるだけ居て欲しい>

従兄妹どうしの再婚であったため、皆、子供の頃から良く知っている関係であり、気兼ねなく相談したり、助け合ったりすることができる。世代間の差や考え方には違いがあるのは当然だと受け止めており、できる人ができるだけやるのが一番よいと考えている。将来についてもあまり心配をしていない。できるだけ、家で過ごしてほしいと望んでいる。

主人とは従兄妹どうしです。お姉さんも次男の弟の方も、私からしたら従姉弟同士でしたので、子供の頃から良く知っているんで、いろんなことを相談しやすいですよ。おばあちゃんが入院したときも、今日はお姉さんが行ってくれる、明日は私というふうに、なにげに、ばあつと話をもう出来ちゃうんですよ、本音で。あんまり先のことは心配ないんですけど、できる人ができるだけやれば、一番いいかなと思ってます。

私にとっては、義母になる前におばだったので。小さいときから知ってるので、気性とかそういうのもね、私は東京の専門学校に来たんですけど、そのときに、ここに少しお世話になったこともあるので、知らない中へほっとっていうわけではないですよ。だから、お互いの事情とかも、全て分かって、親戚でしたのでね。… … …でも、ほら、年寄りってね、言われたから変わるってものじゃないので。それは、しょうがないですよ。世代とか考え方の違いがあるので。お互いがお互いに一生懸命やった結果ですのでね、それは誰も悪くないと思うので。基本的には家で、できるだけ、いさせて、居て欲しいとは思いますがね。

3. 人生満足感 <一番葛藤があったのは子供に対する育て方、何が正しいか一つだけではない>

再婚後、子供の育て方で悩み、姉や夫の兄弟に相談しながら、精神的にも葛藤のある時期を過ごしている。何が正しいか、一つだけではないという心境に落ち着いた。将来は、夫婦で支えあうのが基本だと思っているが、実家のある田舎に移り住み、自然の中でゆったりと暮らすことを願っている。

主人と長男とおばあちゃんの3人生活がずいぶん長かったです。隣ですと、3人で生活していて。それで私が来たときに、一番葛藤があったのは、子供に対する育て方の考え方の違いですかね。まだね、介護で寝たきりっていうわけじゃないので、そういう面では、これからまた先のことですけど。私が来たときには中学3年の思春期だったので、難しいですよ。何が正しいか、一つだけではないです。ずいぶん、落ち着くまでには時間がかかりましたね。

最初の頃はね、鬱にもなりましたがね。自分の努力でどうかなることだったら、努力するんですけど、どうにもならないことってありますでしょ？ 主人は、話は聞いてくれるし、言ってることもわかってはいるんですけど、やっぱり、どうすることもできない。間に入ってどうすることもできないみたいな、どっちがずみみたいなところがありましたよね。だから、主人なりには、いっぱいいっぱいだったでしょうね。

姉に相談することが多いですね。姉が一番分かって、的確なアドバイスを。あとは、主人の兄弟にも相談しましたがけれども、みんなにね。前は、なんでも自分で全部処理しないと気がすまない性格をもってたんですけど、やっぱり、自分の力じゃ、どうすることもできないってことにおち当たると、やっぱり、誰かに聞いてもらわないと、自分の考えだけで、進んでいいときと、悪いときとがあるので、相談しましたね。

元気な頃は、まだおばあちゃんとお姉さんとか弟の家族とかで、みんなで旅行とか行ってたんですよ。そういうのはよかったな。今はちょっと、もう、行く気にもならないみたいなので。やっぱり、お正月に全員集まったり、おじいちゃんの法事を、みんなでやったり、そういう時は楽しいですよ。

基本的には夫婦で支えあっていないといけないんでしょうけど、まあ、勝手な思い込みですけどね、私のほうが10歳若いので、主人よりも。私が残るとして、自分は、一人残ったらこうしようとか、時々考えたりはしますけども。でも、どっちがどうなるかわかんないですからね。やっぱり、この家は長男に任せて、私は、実家のある田舎へ引っ越そうかなと。そうできたら、いいかなとも思ってるんですけどね、姉とかね、友達とかいるので。私は学生時代、東京で過ごしてるんで、友達がたくさんいるんですけど、やっぱり、老後って考えると、若いときは、ものすごく、田舎が嫌いで、都会にあこがれて、学校も都会に来たんですけど、この年になってくるとね、やっぱり、自然の中でって。今もやっぱり、自然、自然って、40くらいから、すごく思いますね。自然の中でゆったりと、のほうがいいですかね。

厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）

分担研究報告書

介護関係に関する質的研究

分担研究者 高橋龍太郎 東京都老人総合研究所参事研究員

研究要旨：介護のプロセスをめぐる被介護者－介護者の意思、考えは家族構成や地域によって大きな違いがみられた。しかし、介護関係の安定性は、過去の被介護者との生活史とそれに基づく介護者の能動的な関与によって保たれていることは全体として共通しているように思われた。後期高齢期の被介護者でみられる生活時空間認識の不明瞭化は、今後の介護への不安要因になりうる反面、安定した家族生活に積極的に寄与している可能性がある。

A. 研究目的

介護は一人一人の被介護高齢者とその家族・地域状況の中で営まれる個別的、特異的なものであるが、そこには介護保険制度という時代の大状況の影響がみられる。このようなダイナミクスを追究するためには量的社会調査の結果を参照しつつ、個々の事例を質的に分析することが有効であろう。本研究では、調査票に基づく量的調査と訪問面接による質的調査が一体的に計画された。介護保険制度の影響を含め、現在のわが国における介護関係の実態を個別性と全体性を視野に置いて検討することが質的研究の目的である。

B. 研究方法

東京都葛飾区と秋田県大館市・田代町在住の要介護認定を受けた被介護高齢者とその主介護者それぞれ 14 組、15 組を対象とし、2 人の研究者がペアとなって訪問、面接調査を行った。インタビュー時間は合わせておよそ 2 時間で、了解が得られた事例では内容を録音し、そのトランスクリプションをフィールドノートとともに分析に用いた。

C. 研究結果

同居形態の変化、家族人数の減少の中で、

介護を担う介護者は長期的な介護を支える仕組みを模索している現状があった(葛飾区、83 歳女性、要介護 2)。フォーマルなサービスの利用法は極めて個別的であり、介護が始まる以前の被介護者との関係が強く影響を与えている実態が示された(葛飾区、92 歳女性、要介護 2)。一方、高齢者自身は、「私いい人」(大館・田代、92 歳女性、要介護 2)で象徴されるような、自己概念の拡がり、自己と他者の区別の希薄さがみられ、80 歳を超える後期高齢者でその傾向は顕著であった。

D. 考察

Brown C, Lowis MJ(J Aging Studies, 17:415, 2003)らは、エリクソンらの提案する第 9 ステージ「老年的超越」を、60 歳代と 80・90 歳代の高齢者の比較検討から実証しようとした。本研究の対象者においても同様の傾向が認められ、後期高齢期に向かって「生活時空間の縮小」と同時に進行する「理念的境界の拡大」が示唆された。

E. 結論

時代の変化は介護関係の地域特性に影響を与えているが、生活実態を見通す介護者の能動的関与によって被介護者の安定したくらしが保たれているようである。

添付資料

介護関係に関する質的研究 高橋龍太郎

● 葛飾区、大館・田代における質的調査のフィールドノートの概要

介護の実感から関係性の確執へ

「裏に住んでいる娘」(葛飾区 0006314)

92歳の女性、要介護2、息子とその嫁、3人暮らし、裏に娘が住んでいる

被介護者本人が席を外してから、声を低めて同じ敷地の裏に住んでいる被介護者の娘のことについて、延々とつらさを訴える。毎日何回となく顔を出して、細かい点について注文を付けて行くらしい。心が休まることはないという。

「夫の前では本音がいえず」(葛飾区 0005308)

75歳の男性、要介護2 妻と2人暮らし、娘が1人いるが頻繁な交流はない

歩行、入浴に介助を要するが、2人で近所に買い物に出かけたりする。本人は自分の介護はあまり大変でないと思っている。多少、友人、親戚との付き合いはあるようであるが、近隣との付き合いは乏しく、隣人から「(夫が病気になって)ざまあみろ」といわれたときは、ショックを受けた。妻の言動はなにか不自然で、夫がときおり妻の発言を押さえるようなしぐさをする。

翌日、Nが夫の留守中電話をすると、妻は延々と自分の窮状を訴えた。特に、夫が「自分は育ちがいいがお前は云々」と馬鹿にすること、夫の兄弟に長年多額の援助をしてきて、そのため自分たちの生活は苦しかったこと、などが大きかったらしい。

「積年の不信感、今日は時間がないの」(葛飾 0007200)

89歳の女性、要介護1、息子とその嫁、孫(男)が2階に、本人が1階に住んでいる、隣に次男夫婦が住んでいる

住宅街の角に位置した一戸建て住宅で、嫁がせわしない様子で対応に出、しきりに忙しい、忙しいと訴え、被介護者本人と面接したい旨を話すと住宅横の別の入口を指し、そこから入って声を掛けてくれという。被介護者本人とのインタビューでは、ごく普通の介護関係にあるように感じられた。その後、嫁とのインタビューをしたが録音は拒否された。介護が始まるよりもずっと前から、長年にわたる姑に対する強い不信感、隣の次男夫婦に対する不信感、自分の病気との闘い、が背景としてあった。昼近くになった頃、介護者の夫(長男)が妻に何か声をかけていった。そろそろ昼食の時間だが、ということをお願いしたかったようであり、調査者の顔を見ることもなく、むしろ調査者を避けているように思われた。介護者は、自分の思いのたけを聞いて欲しかったようである。

伝統的互酬性 (Indirect or Generalized Reciprocity)

「火事をきっかけに痴呆が進行」(大館・田代 3200309)

91歳女性、要介護3 三男夫婦と3人暮らし、被介護者本人の子供は他に5人いるが、それぞれ理由があって介護の助けはほとんどできない。

2年前、隣から火事が出て、一時他所へ避難生活を余儀なくされ、その間に本人の痴呆が急激に進行し、昨年は、とても大変な毎日だった。現在はかなり落ち着いてきた。嫁は他の人ではなくなぜ自分が介護をしているのかということをしっかり受け入れており、自足している印象を受けた。嫁は、仕事をやめて時間的な余裕ができたから心の余裕もできたと説明した。

「退職後の子供としての自然な流れ」(大館・田代 3202404)

87歳の女性、要介護3 長男と嫁、3人暮らし、ADL全面介助必要

家は広くてきれいに整とんざれており、庭の手入れも行き届いている。小鳥をたくさん飼っている。息子は退職後、規則的で淡々とした生活をしている様子である。最後嫁が外出から戻って話しに加わる。妻は主介護者の夫とは意見が違うので、夫が介護するのに任せている。

繰り返す時間、振動する時間

「高齢な夫婦二人の日々」(大館・田代 3204009)

82歳の男性、要介護1 妻と2人暮らし、子供は3人いるが、ときどき来る程度、妻の体調は若干不安がある。

大きな庭と立派な家で、つい最近まで本人が毎日庭の手入れをしていたそうである。高齢な夫婦2人での安定した生活ぶりが伺われる。何にも特に期待せず、このような状態が続くならそれでよいという印象を受けた。

「私いい人」(大館・田代 3204607)

92歳の女性で要介護2 長女夫婦と独身の孫の4人暮らし、主介護者の長女は心筋梗塞をしてから健康に不安があり、体調も良くない。あまりうまく介護できていないという思いもあるが、関係はまずまずよい。

家も大きい、その周りに畑があり、野菜なども収穫している。長女の夫(婿)は我々から見えるところで畑や庭の手入れをしていたが、インタビューの場には一度も顔を出さなかった。本人が何度か繰り返した「私、いい人、この人は———」という言葉は、長女を批判するというよりも、自分を表現する言葉である。デイサービスが介護者、被介護者の両者にとってとてもよいようだ。

同居の中の別居意識、究極の同居のあり方か

「文筆業の息子」(葛飾区 0004611)

83歳の女性、要介護2、息子(長男)、嫁、孫(男)と4人暮らし、2世帯住宅で、1階に本人、2階に息子一家が住んでいる

息子と嫁が世話をしている。排泄以外は全般的に介助が必要である。本人は、家族関係はとてもうまくいっていると思っている。この1年で2回入院している。介護して1年になる。息子は恩返しの意識はない、老いていくということに関心がある。負担感はない。

関係の保続と破綻の予感

「二男がキーパーソン？」(葛飾区 0003403)

85歳の女性、要介護2、一人暮らし、近くに2人息子が住んでおり、世話をしてくれる介護を始めてまだ1年にならない、入浴や歩行に介助を要するが負担感はない。昔自営業をしていて、1階を仕事場に使っていた。近くで理容業をしている長男が電話をするとすぐやってくる。本人によると、長男より二男に、いろいろ手続きをしてもらったり、援助をもらっているという。長男は気さくにいろいろ話してくれるが、なんとなくどこか表面的な印象を受ける。

介護の限界点、代表例か、サンドイッチ世代

「地場産業危機を支える郷土の人間関係」(葛飾区 0008812)

81歳の女性、要介護1、被介護者は長男一家と隣りあわせて住んでおり、被介護者の孫が夜だけ泊まっている。長男一家は夫婦ともう一人の孫の3人家族。年金以外に、自宅の一部を家内工場として外国人に貸して賃貸収入を得ている。

A駅からすぐだが、10数軒の家が閉鎖的共同地域を作って、閑静な環境にある。最盛期は8人くらいの従業員を使って自営業を営んでいた。そのうちの一人は、今でも、色々世話を焼いてくれる。この人を含め、近隣の友人、知人と濃厚な関係を続けてきた様子が言葉の端々に現れていた。介護者である長男の嫁にとって被介護者本人は、あまり負担ではないようで、むしろ、お互い再婚同士で結婚して、子供のことで心労が耐えなかつたらしい。被介護者と同じ町の出身で夫とはいとこ同士の関係にあり、お互いに昔から顔なじみだったそうである。暮らしは楽でなく、生活全体がつつましい様子が窺われた。

● 分析の方向、課題

↓
介護保険開始後の大状況変化の影響

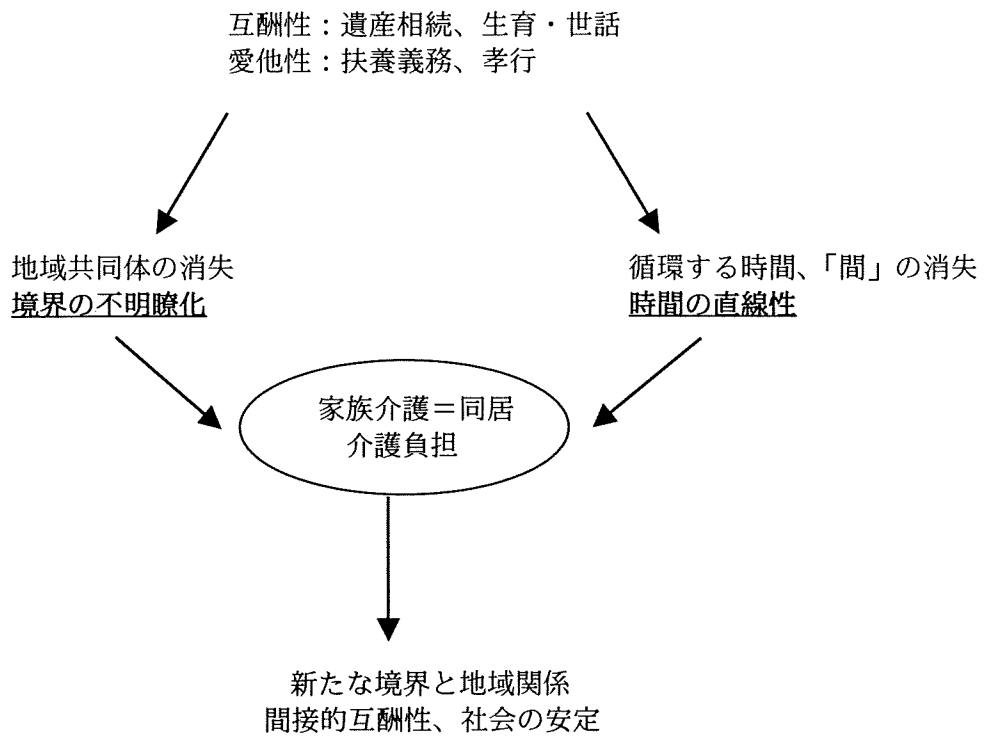
↓
Provider から Enabler へ（自治体）、Recipient から User へ（高齢者）
介護の共通言語化
サービスの利用－「2杯目からのよろこび」
特養入所待機者の激増

↓
直接的互酬性の内容の追究、特に「くちきりの贈与(opening gift)」「てうちの贈与(clinching gift)」「せがみの贈与(solicitous gift)」について(マルセル・モース「贈与論」)
キーワード：村落的「総有」「共同所有」から市場交換経済社会へ

日本の共認体質は現存するか
キーワード：共食、「送り膳」「おすそ分け」
期待可能な集団所属性、社会的交換ヒューリスティック（山岸俊男）

「直線的な時間」と「循環する時間」を捉えることは可能だろうか

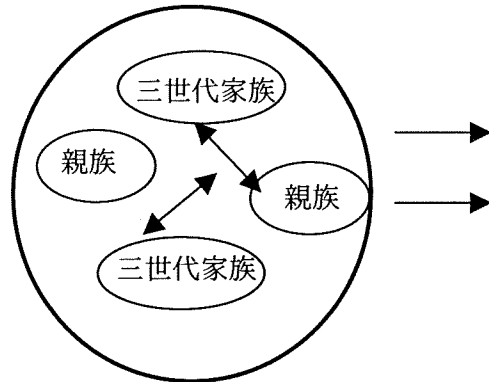
● 互酬性(Reciprocity)と愛他性(Altruism)の構造をめぐって



● 境界(Boundary)について

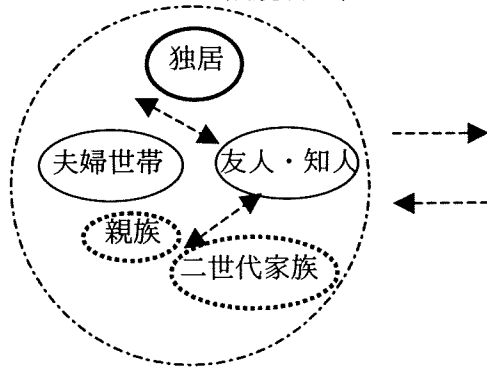
一世代前の地域共同体

外部に対して閉じられた共同体



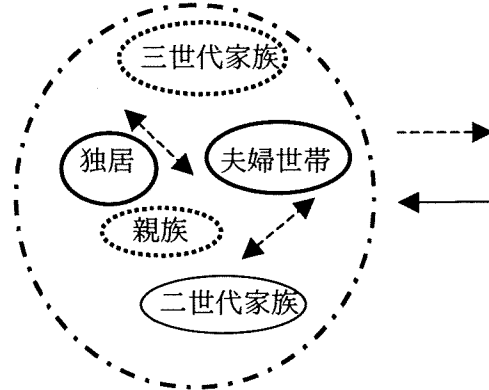
現在の都市社会

無規制な社会



現在の農山村社会

規範の残存



● 時間の直線性についての記述

過去から現在への移行は物理的観察の対象ではなく、意味的な了解の対象
(中島義道)

実在するのは、時間の言葉を語らしめるさまざまな出来事だけである
(滝浦静雄)

上手に思い出す事は非常に難しい。だが、それが、過去から未来に向かって飴のように延びた時間という蒼ざめた思想(僕にはそれは現代における最大の妄想と思われるが)から逃れる唯一の本当に有効なやり方のように思える。
(小林秀雄)